

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	お茶の水女子大学	拠点番号	D 0 7
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	誕生から死までの人間発達科学 (Studies of Human Development from Birth to Death)		
研究分野及びキーワード	<研究分野:心理学・教育学・社会学・文化人類学> (対人コミュニケーション)(カウンセリング)(子育て支援)(教育問題)(社会福祉論)		
専攻等名	人間文化研究科人間発達科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 内田 伸子 教授 他 15名		

拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成16年1月現在）を抜粋

<本拠点がカバーする学問分野について> 1) 発達心理学・社会心理学・認知心理学・脳神経科学（基礎的心理発達過程の解明と教育的支援） 2) 臨床心理学・教育臨床学（家庭・学校・地域における発達危機の診断と臨床支援） 3) 教育社会学・家族社会学（子どもから成人へのトランジションに及ぼす社会・文化的要因の探求） 4) 社会学・教育科学（中高年期の危機的移行と社会的支援に関する長期的研究）
<本拠点の特色及びその目的等> 乳幼児虐待、コミュニケーション退化、学力格差の増大、若年無業者の増加、中高年期離婚・自殺の増加、これらの人間発達の今日的課題を解明・診断し、処方箋を提出するため、時間軸としての発達を「誕生」から「死」まで網羅し、家庭、学校、職場、あるいはさまざまな文化を視野に入れ、人間行動から脳神経科学までを扱う、生涯発達追跡研究センターを構築する。アジアにおける女性研究者の拠点をめざす本学の将来構想のもとに、世界水準の生涯発達追跡研究センターを目指す。
<COEを目指すユニーク性> 本拠点は、1)生涯発達過程の解明（誕生から死までの、長期的なパースペクティブに立つ）、2)縦断的追跡研究（横断的にとらえるのみならず、縦断的に解明する）、3)学際性（心理学、教育科学、社会学を中心とする各ディシプリンが、それぞれの学問的方法論によって人間発達を多様にとらえとともに、相互に連携して複眼的・総合的に人間発達にアプローチする）、4)行動科学的アプローチと脳科学との統合（人間発達の基盤解明を、行動的データだけでなく脳神経科学的データとの照合で行う）などの特色を有する。これらの特色をもった人間発達科学の拠点は、国内外を問わず皆無である。
<本拠点のCOEとしての重要性・発展性> 1) 今日の変動社会は、矢継ぎ早に人間発達上の諸問題を生んでいる。それらイマージェントな問題は、心理学、教育科学、社会学など学際性を持ち、また行動科学的アプローチと脳科学を結合させた、総合的な人間発達科学の展開を要請している。 2) 誕生から死までをカバーした縦断的追跡研究は、国際的に見ても例がない。学際的アプローチによる縦断的データの蓄積は、人間発達科学を格段に発展させる契機となる。 3) 生涯発達追跡研究センターの構築により、人間発達科学にかかる高度な研究人材の機能を果たすとともに、積極的な臨床支援、政策提言によって社会的貢献が期待できる。途上国における教育支援をも活性化できる。
<本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果> 1) 今日の「人間発達」に関する危機 的状况に対処し、適切な診断と処方箋を作成可能な、恒常的な生涯発達追跡研究センターを維持する。 2) 本拠点における「誕生から死まで」をカバーした縦断的研究は、国際水準を凌駕し、世界的な研究拠点となり得る。 3) 能力や就職機会、生活機会における社会階層間の格差拡大などの社会的趨勢に対して、社会的弱者の観点から政策科学的知見を獲得する。 4) 世界的な研究拠点として情報発信するだけでなく、地域や附属校園と連携することで、身近な声・問題を収集し、地域密着型の新しい拠点となりうる。 5) 世界水準のプロジェクトの遂行を通じて、教育システムが強化され、女性研究者の輩出が期待できる。
<背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等> 1) 人間発達に関する研究拠点は、海外においてはミネソタ大学などがあげられるが、いずれも乳幼児期から青年期までに限定されており、生涯にわたる人間発達を視野に入れた拠点は少ない。アジアおよび国内においてもCOEと云う研究拠点は少ない。 2) 本学が目指す生涯発達追跡研究センターは、文字通り独創的な研究拠点として、研究成果を発信するとともに、高度な研究人材の供給を可能とする。 3) 縦断的研究によって得られた知見は、人間発達の諸問題に対し学問的基盤を有する臨床的処方箋や政策提言を可能とする。 4) アジアにおける、唯一の人間発達科学研究拠点として、女性研究者の輩出と世界貢献が期待できる。

機 関 名	お茶の水女子大学	拠点番号	D 0 7
拠点のプログラム名称	誕生から死までの人間発達科学		

21世紀COEプログラム委員会における評価

（総括評価）

このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、下記のコメントに留意し、当初計画の適切な変更が必要であると判断される。

（コメント）

「誕生から死までの人間発達科学」という新しい魅力的なテーマに積極的に取り組もうとした努力、および、チャレンジングなプログラムを遂行していこうとする努力は評価できる。

しかしながら、この間の成果を見ると、次のような問題点を指摘することができる。すなわち、「誕生から死までの人間発達科学」を謳いながら、プログラム全体を貫流する総合的研究が見えない。したがって、プログラムに参加する各研究者がこれまでに発表してきた研究の成果も、かならずしもCOEのテーマに関連づけられておらず、各自が行っている縦断的視点を持った個別研究、あるいは単独論文の寄せ集めの観がある。個々の研究プロジェクトをとりまとめる理論的枠組みと方法論が欠如しており、発達理論の発展と現代の社会的背景をもとにした新しい理論構築も重要であろう。単に人間の一生を時間的に追うだけではなく、誕生から死までの明確なコンセプトづくりが必要であり、生から死に至る全体を視野に入れた発達観の組み替えが期待される。また、「誕生から死までの人間発達科学」を論じる根拠となる「死」についての総合的な視点が欠落している。誕生から死までを包括的にとらえることを試みようとする、新たなプロジェクトの展開が必要であり、逆に、新たにプロジェクトを展開しようとする理論的に拡散し、プログラムを構成する各プロジェクトの有機的連関とそれらを統合する新しい発達理論の構築という新たな困難な課題に直面することになる。各プロジェクトが個別化し、分散化しないように注意するとともに、焦点を絞って、新たな人間発達学の提示・確立をはかるための計画変更もあり得る。本プログラムにふさわしい質的深まり、あるいは一貫したグランドデザインに基づく実績の構築が望まれる。なお、「死」に関しては、同様の主題を設定した他のCOEプログラムとの連携を試みることも考えられる。